

キヌサヤエンドウ新品種「紀州さや美人」の小ほう発生 および収量に1回目の追肥施用時期が及ぼす影響

1. はじめに

当センターで育成したキヌサヤエンドウ品種「紀州さや美人」は、果梗への小ほう（ハカマ）の発生が少ない品種です。小ほうは出荷時に手作業で除去する必要があるため、本品種の導入により出荷調製作業の省力化が期待されます。従来品種「美笹」の夏まき年内どり栽培では、最初の莢が着く時期に1回目の追肥を施用するのが一般的ですが、「紀州さや美人」についてもその施用時期が適切か検討しました。

2. 材料および方法

2011年8月30日に露地圃場において「紀州さや美人」を播種し、基肥として窒素成分7.5kgN/10aを施用しました。1回目の追肥施用時期として①早期区（9月29日）、②慣行区（10月4日：「美笹」と同時期）、③晩期区（10月27日）という3処理区を設定し、慣行量相当の8kgN/10aを施用しました。いずれの処理区とも、2回目の追肥は11月22日に6kgN/10aを施用し、年内の小ほう発生率と収量を調査しました。

3. 試験結果

「紀州さや美人」では、いずれの処理区でも、

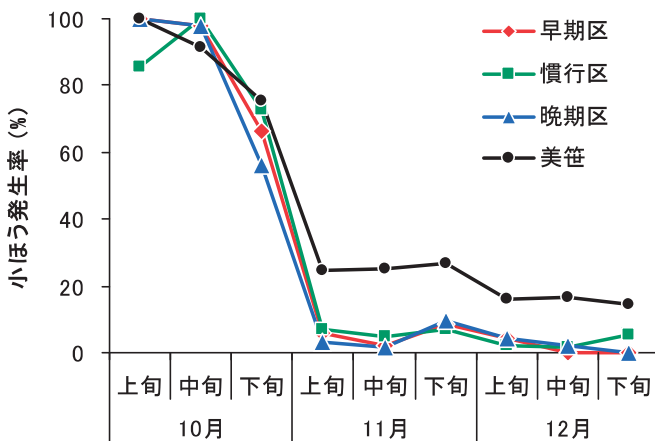


図1 追肥施用時期と小ほう発生率との関係

収穫初期に小ほう発生率が高いものの、11月以降にはほとんど発生がみられなくなり、1回目の追肥施用時期による差異は認められませんでした（図1）。

「紀州さや美人」の総収量は820～870kg/10aで、慣行区と晩期区では差はありませんでしたが、早期区でやや収量が少なくなる傾向がみられました（図2）。また、今回の試験では、「美笹」より総収量が少なくなるものの、12月の収量低下が比較的小さいという特性を示しました。

4. まとめ

以上の試験結果から、「紀州さや美人」の1回目の追肥の施用時期は、慣行の「美笹」と同時期で問題ないと考えられます。また、施用時期を早めると収量が低下するという結果は、基肥施用量を増やした場合に収量低下がみられるという既報（暖地園芸センターニュース第40号）と類似した結果でした。

今後は、「紀州さや美人」の生育後半の収量増加を目指して、2回目以降の追肥について、より適切な施用量や施用時期について検討を進めていきたいと考えております。

（園芸部 松本 比呂起）

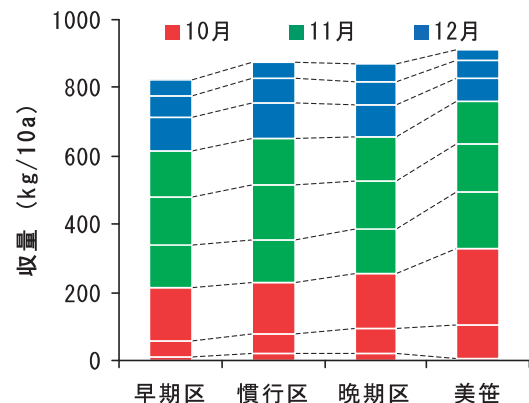


図2 追肥施用時期と収量との関係
同色内での区分は下段からその月の
上旬・中旬・下旬をあらわす